

今西錦司がめざしたもの

片野 修

今西錦司の評価

今西錦司は生態学、霊長類学、進化論、分類学、文化人類学において多大な功績を上げた知の巨人として高い評価を受け、文化勲章を受賞している。一方で、その独自の進化論を中心に、1970 年台以降には若い研究者の攻撃対象になってきた。現在の視点から今西錦司をどのように評価すべきかはむずかしい問題であるが、私は次のように結論づけている。

今西錦司が主張した生物社会の論理、とくに競争を否定した棲み分け論、霊長類学におけるアイデンティフィケーション理論、種内の多様性を考慮しない進化論はいずれも現在有効性を失っている一方で、個体識別を用いた動物社会の研究法は世界に大きな衝撃をもたらした。今西が用いた意味とは異なっているものの、「すみわけ」という言葉は、日本社会に広く浸透し、その重要性は近年ますます高まっている。このような影響をもたらした生物学者は、日本ではほかに生まれていない。

以下の考察では、この論旨についてくわしく検討してみよう。

今西の研究の出発点は、登山と強く関連付けられる。1940 年頃まで、万年雪や雪崩についての研究とともに、登山の過程で見つけた生物の分布や分類についての報告が多い(川喜田 1989)。1933 年に今西はカゲロウ 4 種について、溪流の緩流部から急流部にかけて棲み分けることにはじめて気がついたとされている。この頃、京都大学の農学部に在籍していた今西の周りには、1944 年にマリアナ島方面で戦死する可児藤吉や、のちに理学部の教授となる森下正明、日本のフェアブルと称せられる岩田久二男がおり、議論を戦わせていたらしい。

可児藤吉と棲み分け論

渋谷寿夫の『生態学史の諸問題』(増補版)(1973)によると、1937 年に京都大学理学部動物学教室で開かれた談話会の記録で、可児が「棲み分け」という言葉を使ったことが残されている。また、可児は 1944 年に出版した『溪流棲昆虫の生態』(1978)において、きわめて精密で数量的なデータに基づいた成果を発表している。可児にとっては、同じ分類群に属するという事は、生活形が似ているということであり、“同位種”の関係にあるということになる。可児は『溪流棲昆虫の生態』において、同位種の間には排他的であると同時に相補的な占位関係—この関係をわれわれは<棲みわけ>とってきたのだが—がみられると記述している。このほか『溪流棲昆虫の生態』では、きわめて精密で数量的なデータに基づいた成果が多数発表されている。可児藤吉全集全 1 巻に収録された、そのほかの論文を合わ

せて読めば、可児の研究の偉大さがよくわかる。

可児は『溪流棲昆虫の生態』の最後に、「読者諸氏には今西錦司氏の著書『生物の世界』をお読みになることをおすすめする。これは生物の生活について書かれたすぐれた理論の書である。私の記述を読まれて抱かれる不満は、この書物によって必ずみたまされることと思う」と書いている。今西と可児の関係がよくわかるとともに、今西の関心は個々の水生昆虫の分布や棲み分けの詳細な記述ではなく、生物の世界全体の理解にあったと考えられる。当時、今西と可児、それに森下らは、農学部で激しく議論を戦わせ、その議論の中で棲み分け理論が発展し、その具体的データは可児が、理論的發展は今西が担ったと理解するのが適当であろう。

生物社会の論理

後年、今西は浦本昌紀との対談において、「棲み分けの発見者は今西錦司か、可児藤吉かなんていうてる人は、なんにもわかっていない」と言って笑っている。それでは、今西は水棲昆虫の研究から何を明らかにしたのかということ、それは「種社会」の発見だということになる。

今西の『生物社会の論理』（1949）によると、加茂川において4種のカゲロウは、流速に応じて岸から順に棲み分ける。この4種は形態的に似ており、相似た生活の場を棲み分けることにより、お互いに相対立しながら相補的に一つの生活形社会を構成している。ここでは、一方の存在によって他方の成長が妨げられることはなく、両者がほんとうに相争わなければならないような対立もおこらない。このような関係にある種社会の総体が同位社会である。また、季節的なちがいがから、実際には同じ時期に同じ場所で関係しない、あるいは部分的にしか関係しない社会の総体を複合同位社会と呼んだ。「相補的」の意味はわかりにくい、空いている空間を占めたり協調的な関係を発達させたりすることではないかと思われる。

ここで今西は「競争」を完全に否定してはいないが、相補性の方に重点があり、表面上競争しているかに見えても、それは他方の成長に影響するような重要なものではないと考える。このような複合同位社会がさらに高次のレベルで集合することによって、生物社会や群集が成立することになる。この議論に可児や森下が賛同したか否かは明らかではない。

競争があるかないかを示すためには、一方の種を取り除いたり、付け加えたりする操作を加える必要がある。あるいは、両種の個体数と分布の動態について、多大な観察データを集めることが欠かせない。したがって、それらを欠いた段階で、競争が重要でない結論づけるわけにはいかない。現代の生態学では、競争状態になく棲み分けているように見える関係も、過去の競争の結果であるかもしれないと考えるので、今西の主張は認められていない。

また、棲み分けについては、可児の資料にある生データを見ても必ずしも明確ではない。同位種が同じ場所で混生していることもあるからである。棲み分けを強調しすぎることに

よって、混生あるいは共存についての理解が妨げられてしまったと考えられる。この問題は渋谷によって指摘されているとともに、私も別の論考で批判している（片野 1990, 2014）。

現在では、さまざまな動物群についての研究から、環境要因によって近縁種が棲み分ける現象はあるものの、混生している場合ははるかに多いことが明らかになっている。その場合には、次に食い分けなど機能的な説明がなされるものの、棲み分けるわけでも食い分けるわけでもないことも多い。それぞれの種の個体数の増減や群集における生物間関係、さらに攪乱からの経過時間等によって、生物の分布や種間関係は変わると考えるのが、現在の生態学である。今西の棲み分け論は、たまたま注目した水生昆虫の分布についての知見を、十分な情報なしに生物一般に拡張した稚拙な世界観だと結論づけられる。

ただし、今西は 1940 年に、京都大学農学部大学院にいた可児藤吉、岩田久二雄それに森下正明ら若手の研究者を集めて、京都近郊のさまざまな植生下で動物群集の定量調査を行っている（森下 1974）。採集された動物を種ごとに分けて、棲み分け理論を群集全体に拡張する試みであったと推測される。この研究の成果はどこにも見当たらず、おそらくは群集の複雑さと動物の混生によって挫折したと思われるが、このような試みに挑戦したこと自体は高く評価されるものである。

生態学の進展と今西錦司

今西が強調する種社会という概念は、種の維持のために個体が同じ方向を向いて協調するというものであり、進化論では変わるべき時にはすべての個体と同じ方向に変わらなければならないということになる。この考えは、少なくとも生態学においては、社会生物学が登場するまで、ほとんどの研究者に支持されており、1960 年に出版された宮地伝三郎の『アユの話』や 1976 年に出版された森下正明の『動物の社会』でも受け継がれている。

一方で、生態学においては、1940 年代以降、同じ種の個体群が大きく変動し、個体密度によって個体の成長や繁殖が大きな影響を受けることが注目されるようになった。京都大学の内田俊郎や森下正明が行った研究は世界的にも評価されている。また、チャールズ・エルトンが 1927 年に公刊した“Animal Ecology”では、個体群の動態に加えて食物連鎖を通じた群集構造についての研究成果が紹介されていた。一方、棲み分けていると述べたまま、それ以上動物の生活に切り込むことができなかつた今西の生態学は停滞したままだった。この点について森下は後年、生物の経済学的な側面や量の問題が今西理論では欠けているとして、量的生態学をつくらなければならないという主張を可児藤吉とともに行ったと述べている（森下ほか 1975）。今西はエルトンの“Animal Ecology”を愛読していたというから（今西ほか 1975）、いずれ機能的側面を含めた生態学について論じるつもりであったかもしれないが、それは達成されなかつた。

先に述べたように、可児は太平洋戦争の中で戦死した。戦後、京都大学の農学部では内田を中心に個体群生態学が活発になった（大串 1992）。森下は九州大学で数学と個体群を組

み合わせた独自の生態学を発展させた（森下 1979）。京都大学の理学部では、宮地伝三郎を中心に河川の生態学が発展していった。彼らは明言していないものの、今西の棲み分け論では生物群集を理解する手法としては不十分であると認識していたと思われる。そして、それを突破する今西の弟子あるいは協力者は、いなくなっていた。

哺乳類の社会研究

今西は、戦後になると哺乳類の社会を研究するようになる。1948年に都井岬の半野生馬の研究を始め、やや遅れて高崎山や幸島でニホンザルを餌付けし、個体識別に基づいた研究を開始した（川喜田 1989）。今西のもとには、伊谷純一郎や河合雅男など若くて優秀な研究者が集まり、世界を驚かせる研究が生み出されていった。今西は1950年に人文科学研究所員となったことで、自由に研究することができるようになった。データを取ったのは若い研究者であったが、それを組織し発展させた今西の功績は大きい。

水棲昆虫の棲み分けとニホンザルの社会研究の間に、必然的な連続性はみとめられないが、ほんとうに棲み分け論を信じていたとすれば、霊長類を研究したのは幸いだったかもしれない。なぜなら、日本ではニホンザルと近縁な同位種はおらず、棲み分けを否定する材料も見出されなかったからである。

今西は哺乳類の社会においても、種社会の意義を強調した。そこでは、自分の社会理論がどのようにサル社会で実現するかに関心があったように思われる。登山や探検で知られる今西は実は大変な読書家で、暇さえあれば本を読んでいたらしい（今西ほか 1975）。ニホンザルのフィールドでも、伊谷が山を駆けずり回っている間に、今西はずっと宿で本を読んでいたと伊谷が述懐している。

ニホンザルでは、個体識別ができるほど個体間に行動や生態のちがいがあがる。しかし、それぞれの個体が勝手に振舞うだけならば、種社会の統合はみとめられない。そこで今西は順位の低い個体は決して順位の高い個体に逆らわない順位制と、若い個体が群れのリーダーの個性を学んで取り入れていくアイデンティフィケーション・セオリーに重点をおいた（今西 1957, 1972）。ここで今西は、ニホンザルの個性を群れの統合に役立つものでなければならぬと考えた。

しかし、その後のニホンザル研究において、高崎山で見られるような順位制やボスザルによる強いリーダーシップが必ずしも見られないこと、雄はすべて生まれた群れを離脱し、そのまま群れのリーダーになるわけではないことが明らかにされ、今西の世界観は揺らいでいく。群れを離脱した雄の生き方は多様であり、そこでは群れによる秩序はもはやなく、個体が勝手に振舞っているように思われる。

今西錦司への批判と賛美

今西錦司は独自の生物観をもっており、その研究対象がカゲロウであろうが、イワナであろうが、ニホンザルであろうが、あるいは生態学でも社会学でも進化論でも、変わることはなかった。その生涯にわたる唯一のライバルはチャールズ・ダーウィンであり、ダーウィンを超えることを目指していたのだと私は思う。その過程で京都哲学や軍国主義の影響も受けたであろうが、ダーウィンが重視した同じ種の個体の中に差異があり、競争を通して環境に適したものが生き残るという世界観を全面的に否定した。それが棲み分け論であり、種社会や同位社会の重視であり、個体差の否定であった。

しかし、今西の主張のほとんどは現在認められていない。生物間に共生や協調関係が見られるとしても、それらよりはるかに多くの競争関係がみとめられ、種内においても種間においても、生物はしのぎを削っている。そのメカニズムを明らかにせず、生物の世界を理解することはできない。今西が最も重要だと思っていた種社会の概念は、1960年代以降、社会生物学の登場によって完全に否定された。同種の個体間に大きな遺伝的差異が認められ、個体が種のために行動するのではなく、種の不利益になる行動、たとえば共食いや子殺しを普通に見せることが明らかになったからである。協調的な関係についても、それが種の繁栄ではなく、その個体あるいはそれを構成する遺伝子の成功に関係づけた方が理解しやすい。

霊長類研究においても、社会生物学の観点からの研究成果が次々に発表され、初期のニホンザル研究の成果のいくつか、とくに群れの統合やアイデンティフィケーション・セオリーは否定されている。今西が力をこめて自説を主張したものは、今からするとほとんどの外れに見え、今西の学術的成果はしだいに色あせていった。しかし、それと反比例するように、今西とともに山に登り、あるいは議論を戦わせた後輩たちは、それぞれの学会で中心的役割を担うようになる。伊谷純一郎、河合雅男、梅棹忠夫、森下正明、川喜田二郎など、数え上げたらきりが無い。その中で生まれた今西神話は、多くのファンを生み出し、当時絶頂期を迎えた出版文化の中で本も売れた。1975年に出版された『座談 今西錦司の世界』や1989年に出版された『今西錦司』などは、今西への賛美で満ち溢れている。このあたりの事情はよくわからないが、カリスマ化した今西を批判することは、それぞれの研究者に不利益をもたらす恐れがあったと推察される。

それでも、伊谷純一郎や梅棹忠雄は、しばしば今西と激しく議論し対立している。伊谷は、『今西錦司全集第7巻』の解題で、「もっと極端なことをいえば（今西が）理論構築に用いる材料は、場合によっては虚構であってもよかったのである」と書き、今西の『自然学の展開』（1990）の解題では、「帰属性（同種内での個体の認め合い）についての今西の記述は乱れに乱れ、あい矛盾し、あせりが認められる」と述べている。他人の意見に耳を貸さず、頑なに自分の思想、すなわち種社会や群れの秩序の重視、競争や個性の否定等にこだわった今西の限界を伊谷は捉えていたと推察される。

今西は、進化論に対する日本の社会生物学者による批判については、ネオ・ダーウィニズムを真似しただけのつまらない論考だとみなして気にしなかったと思われる。ネオ・ダーウィニズムでは生物体制の大規模な進化を説明できないという主張は、現在の構造主義生物

学 (池田 2017) に通じるものがあるけれども、今西の『私の進化論』における論議は粗く、ステューヴン・グールドの一連の著作に比べて著しく劣っている。一方で、今西がもっとも重要だと考えていた『種社会』や『棲み分け論』については、それを支持する証拠が積みあがらない一方で、反する証拠が生態学や霊長類学を覆っていった。この間の今西の心情はどうだったのか今は知るすべはないが、書かれたものを読むかぎり、今西は死ぬまで強気だった。しかし、読書家で知られる今西は、研究の世界で自説が否定されていく状況を確認に捉えていたと思われる。晩年の今西は「生態学とは訣別した」と言い、「科学を廃業する」と宣言して「自然学」を提唱するのだが (今西 1990)、もはやついでいく研究者はいなかった。

今西の世界観と個性

今西の主な主張のうち、残っているのは『棲み分け』という言葉だけであり、この言葉はしばしば競争や闘争を隠蔽し、あるいは見ないふりをして、現状の平和な世界を強調する保守思想と結びついている。

人間を含めた生物が無駄な争いをせずに棲み分け、平和な世界を構築することは、人類の理想かもしれない。この観点から、今西の棲み分け論を評価する意見もあるかもしれない。しかし、今西はかつて大東亜省、すなわち日本の支配のもとにアジア諸国が共存共栄するという大東亜共栄圏を信奉する研究所で活動していた (川喜田 1989)。内蒙古の調査は、今西が大東亜省西北科学研究所の所長時代に行ったものである。棲み分け論が大東亜共栄思想と関連している可能性は否定できず、それは競争を乗り越えた先にある人類の理想とは異なるものであろう。

それにしても、今西錦司は個性的な研究者だった。京都大学においては、長らく無給の講師として活動し、登山や探検で成果を出した。満州事変後、30歳のときに南樺太の踏査を行い、32歳になると朝鮮半島の白頭山の遠征に成功する (川喜田 1989)。初めて給料をもらったのは、39歳になってからで、興亜民族生活科学研究所に勤めたときだった。太平洋戦争の開戦直前にはミクロネシアのポナペ島の学術調査を行っている。第二次世界大戦中には、先に述べたように、内蒙古草原の総合調査を行っている。日本の軍国主義に翻弄され、戦争で命を落としたり、食べ物がなくて飢え死にしたりする国民が多々いる中で、今西は軍国主義を利用している。

その後も今西は各地で探検、登山を経験し、やがてアフリカの類人猿の研究にも乗り出している。その過程で、今西は多くの人脈を形成し、弟子を育てている。弟子に自分の著作を書かせる教授が多い時代に、今西は確かに自分だけの力で多くの著書を執筆し、霊長類分野では弟子たちもそれぞれの研究について優れた著作を残している。その結果、霊長類研究は日本の政権や大衆に広く認められ、日本モンキーセンターや京都大学の霊長類研究所が創立されることになる。軍国主義に加担したという批判は免れないだろうが、今西の疲れを知

らない行動力、バイタリティは類を見ず、日本の登山や霊長類研究のパイオニアとしての評価は揺るがない。

さまざまな分野に挑戦したのは、生態学にしても進化学にしても文化人類学にしても、もともと自分がもっていた固定観念から独特の見方を展開するものの、そこから先に展開できずに行き詰まったからである。行き詰まっては次のテーマに移る姿勢は、霊長類学においても同様であり、ニホンザルからアフリカの類人猿へ研究対象を移していく。その経緯は、今西にすれば、ある山を征服したから次の山に行っただけだ、ということになるかもしれない。しかし、その行動は、太平洋戦争において次から次へといくつもの戦線を展開したものの、そのいずれにおいても判断ミスによって退却していった日本軍のように見えないこともない。ふつうの研究者ならば、調査研究する中で過去の誤りを是正し、それを克服する次の課題を見出していくのだが、今西にはその姿勢は見られない。伊谷が今西について「その理論構築に用いる材料は、場合によっては虚構であってもよかった」と指摘したのは、以上のような状況を言い当てたものであろう。

今西が精力的に出版した著作群は、時代が過ぎるにしたがって色あせていった。自分の考えが否定されていった段階で、今西は自己批判するべきだった。棲み分け論は生態学が未熟な時代に出した未熟な生物観だった。進化論はそのメカニズムを描くことができなかつた点で、書き直さなければならない。霊長類学ではアイデンティフィケーション・セオリーは認められず、群れの統率にこだわりすぎていた……。そこまで宣言しても、今西が開拓したものはまだ残っている。

すみ分け論はいくつかの分類群の共存機構としては認められる。今西が主張したものと意味が異なるものの、「すみわけ」という言葉は日本の社会や文化に広く浸透し、未来の共生社会への夢をもたらしている。進化論は、ネオ・ダーウィニズムがすべてではないという点ではまちがっていない。そして、個体識別の有効性や霊長類学の創始者としての評価は揺るがない。さらに広い分野について独自の生物観を示した点は、人によって見方はちがうかもしれないが、魅力的である。

今西が活躍した時代から、もう70年余りが経過するが、世界に与えたインパクトという点で、日本のマクロな生物学において今西を超える学者は生まれていない。可児、森下、内田まで世界の最前線で活躍した日本の生態学は、社会生物学の影響を受けたのち、とくに目覚ましい発展を遂げたようには思われない。論文のレベルは高くなっており、さまざまな技術的発展はあるものの、現在、生態学や行動学の世界規模の教科書に引用されている日本人の論文はほとんど見当たらない。日本の霊長類学は依然として世界のトップレベルを維持しているが、驚くべき発見は乏しくなっている。

チャールズ・ダーウィンと同じように、今西は諸学の黎明期に出現したからこそ、あのような活躍ができたのだ、という見方もできるかもしれない。しかし、何がおもしろいのか、どこに可能性があるのか、を追求する好奇心は、いつの時代にも重要である。今西錦司が生きていたら、自分はまだ誰にも負けていない、と思うかもしれない。

引用文献

- C. S. Elton (1927) *Animal Ecology*. Sidgwick and Jackson, London. (渋谷寿夫訳, 1956, 動物の生態学、科学振興社)
- 池田清彦 (2017) 進化論の最前線。インターナショナル新書。集英社
- 伊谷純一郎 (1990) 解題『自然学の展開』(今西錦司)、講談社学術文庫、pp. 247~258
- 今西錦司 (1949) 生物社会の論理。毎日新聞社
- 今西錦司 (1957) ニホンザル研究の現状と課題。Primates, 1: 1-29
- 今西錦司 (1972) 動物の社会。思索社
- 今西錦司他 (1975) 座談 今西錦司の世界。平凡社
- 今西錦司 (1990) 自然学の展開。講談社学術文庫
- 可児藤吉 (1978) 溪流棲昆虫の生態学。(普及版) 可児藤吉全集 全一卷、思索社、pp. 3-91
- 片野 修 (1990) 個性の生態学。京都大学学術出版会
- 片野 修 (2014) 河川中流域の魚類生態学。学報社
- 川喜田二郎 (監修) (1989) 今西錦司—その人と思想。ペリかん社
- 宮地伝三郎 (1960) アユの話。岩波新書
- 森下正明 (1974) 解題『今西錦司全集 第4巻』、講談社、pp. 471~482
- 森下正明・梅棹忠夫・河合雅雄 (1975) 今西錦司の世界を語る。『座談 今西錦司の世界』、平凡社、pp. 355~379
- 森下正明 (1976) 動物の社会。共立出版
- 森下正明 (1979) 森下正明生態学論集 (第1巻、第2巻)。思索社
- 大串龍一 (1992) 日本の生態学—今西錦司とその周辺。東海大学出版会
- 渋谷寿夫 (1973) 生態学史の諸問題 (増補版)。法律文化社